

1971-1

「地下演劇」第4号 (1971年10月)

演劇的人類学

橋爪 大三郎

Contradictio est regula veri,
non contradictio, falsi.

~ G. W. F. H.

かつての形而上学、ロマンティズムの栄光を目下の舞台より追落して仕舞ったものは実証主義であった。資本制生産様式の大工場が生命の維持を手仕事に抱らずて可能としている。科学は、自然性における自然の自然性＝法則をそのままとりだそう、とする意志である。従って、自然性が眠り＝死の形式だとすれば、科学する人類が自然＝眠りを摘出するこの行為が、人類と云う事実の証しであり、人類のまず第一の栄光である。ところが、科学がこうした死＝眠りを摘出する覚醒した頭脳の行為であることに拘って、この科学自体、科学する人類そのものが既に必ず科学の圏内を脱してしまっているのだ。だから、このことによって、科学者が気付こうと気付くまいと、まず次のような事態が生じている。つまり、科学者がどのように完全に実証主義者であり、経験し、分類し、分析し、定義し、汎化し、法則を導き、証明し、総合し、予測した、としても、決して科学者は自らの視座を消すことはできぬ、自らの尻尾から呑み下し無に帰そうとして果さぬ蛇さながらに。科学は対象性を仮構したまま自己増殖する悪無限後退に陥る。斬り苛む悟性はよりよく理解するためと分割し挙句は空中にでも霧散しようというのか！科学者という世界のペンキ塗りは最後に自身の足許を塗り了せぬ限り仕事は完成しないと云う事に気付く。そこへは暗い声がきこえてもこよう。科学の潰える地点で存在論が蒸し返す。死と覚醒と。自然と意志と。科学という向き合う意識が決して完結しないのは、科学者という特異点が科学にとって没却せられていたせいである。科学に掘れば、全ての対象性＝存在は役に立つのに、この特異点ときたらそもそも何かの役に立つと云うことがない。対象性を仮設する橋桁であったこの特異点では、当然対象性は没し去る。科学は一元論を主張する方法的二元論と云う矛盾だ。汎そ学が、科学の非合理が一切露わとなるこの特異点でまで、自ら体系であろうとすれば、学は科学を離れねばなるまい。扱てまた科学の内部で次のような事態が現下進行している事実にも注目する必要がある。つまり、物質一元論を実証せんとする科学の試みも、レンズの向こう側に究極の実在性を決して何ら発見してはいないと云うことだ、レンズの向こうには常時もレンズを覗いていると云う事実きり見えはしない。素粒子とは見られただけの性質に他ならぬ。物質の実体性はこのように解消しており、存在とは意識である。これが存在に関する科学の身も蓋もない結論だ。星辰のきらめきの外側にもはや我々が何も見ないように、見ることと存在とはかけちがっている。「人は決して在るものを在るがままとして見ることはない」(アリストテレス) 見ることと在ることとは何の関わりもなく、人には見るものが在るだけだ。人だけが在るということからも、何も始まりはしない。物質一元論あるいは素朴実在論で存在と呼ばれていたものが意識に他ならなかった、と言っても、それはただ物質一元論が観念一元論へ移行するだけで、名称は変わっても両者は同一の事情を表明しているにすぎない。根源の実在性を一元的に眼前にもたらそうと云う科学二元論は、このように、その頭と尻尾と

を非在へ垂らしこみ溶かしこませ、過程である胴体の同化異化 in put — out put の暗函函数だけをしか証示しはしないのだ。何といふ悪文だらふ。科学という宗教的心性は対象性を存在と言いちがえ物質を存在として置いたが、物質はニトツテの意識に他ならない。存在とは意識の又の名。観念においては、はじめて単なる意識が意識として確定される。そのことによって、観念は一者としてしかありえず、観念のもとでは意識は個々の多者だ。これら全ての意識を意識する意識の無限性としての観念は、それ自らが作用であり過程である他はないような実在性だ。このようなものとして、観念は人である。

(動物的一元論)

ところで、動物は二元論者ではない。動物は観念を宿さぬ。何となれば動物は「自ら」と云う媒介する意識を持つことのない意識の名称であるからだ。

動物と云う事柄は宇宙に属する。人が動物を見て動物は存在者だなどと思う場合、それは動物という人間のカテゴリー即ち意識が存在であると断言しているにすぎない。動物という事柄そのものは、宇宙の秩序あるいは自然の自然性から一步も外へ出ていない。動物は世界の内に生きない。動物は何ら中心でなく末端でなく全体でなく部分でない。動物は自然現象であり、故、動起しない。動物的一元論とはこのようである。動物は未だ観念でない、と云うことは、動物は未だ自らの死をしらざるを知らぬ、と云うことである。それは時間を知らず、故、自己同一性を知らぬ、ということである。植物が太陽あるいは宇宙の恩恵により直接作動する生命であるように、動物は生命あるものを餌とせねばならぬ。従って、自身も亦必ず生命あるまま他の動物の餌となり、ために横死する。人はこれに反し、料理した食糧を食す。料理は材量である生命に死の形式を付加することであり、火の使用であり、人だけがかくして食物連鎖から自由である。ために、人は、人の死にも、葬礼と云う料理によって死の形式を付加せねばならぬ。料理が文明にとって本質的であるとはこうしたことだ。動物は、自身を、一個の一般者(類)にして個別者(個体)であるとして認めることができない。動物は、観念ではなくて、本能と云う自然現象である。動物は無規定なものとしては宇宙そのものであるから、自然現象あるいは本能としてのみ自らを規定されたものとしている。人が人であるような仕方では、例えば、チンパンジーがチンパンジーであるわけではない。動物の分類は、類ではない。チンパンジーはチンパンジーではなく、アヒルはアヒルではない。アヒルは孵化して数分の間に、自らの肯定的かつ絶対的な価値、即ち母を、本能作用によって刷りこまれる。それは、近くにいて大きくて動くものなのだが、孵化器でかえったアヒルはオレンジ色の風船を母として容易に刷りちがえ、その後に対面した実の親アヒルには見向きもしない、と云うことがおこる。生後直ちに同類と隔離されて飼育された大抵の畜は人間によって刷りちがえられており、人間を母としても、同類すなわち番の相手としても刷りこんでいるため、実の同類と番うことができずしばしば人間と番おうとする。動物には自己という肉体の輪郭すら成立しない。互いに何の関わりもない様々な意識の流路が動物である。

人間は存在者であることによって規定されており、それ故にまだ無規定な宇宙からは出てきているようにみえる。しかし、人間を具体的存在者と、人間とは身体であると、言うことからは人間と動物とは区別がつかない。だが、人間は、これら対象性を全く自らの内容としてのみもつことによって、これらの自然的規定を逃れており、それらから自由でもある。

(人間的二元論)

人間は、動物的一元論を廃棄し、宇宙から出てくることで、同時に自らを自然から区別し、自らに現前するものとしての自然と向き合うに至る。

人間は自己に先行する自然とはじめて対峙する。人間は生身の観念という逆説であり、ひとまず二元論である。人間はその実在性を身体（の機能）へと追求しても観念へと追求しても確認することはできない。人の観念は、それ自体と出されれば、抽象的で無規定なものにすぎぬ。父母未生以前の面目とはこのようなことだ。汎そ規定されたものの実在性は規定するものとの関係においてのみあり、規定されないものは見えることのない宇宙である、と云う袋小路だ。かくして、人間は完全に自然として規定されないという仕方規定されている。あるいは、人間はさしあたり、動物的一元論（同一律）と人間的二元論（排中律）とが互いに排斥し合いながら分ち難く結びついているような、矛盾と非矛盾との非矛盾である。人は、全ての対象物、全ての意識を全称判断することになり、それらから区別され、それらから突出する一者としての観念だ！この全称判断の全称の方に人を含ませるという誤解が形式論理であり、悟性の迷妄だ。学はむしろ宇宙論並びに範疇論を展開せずしてその基礎を築くことはできぬ。人類は、反照する唯一の宇宙のことである。人類は、このため、反照する宇宙である限りで、宇宙そのものから全く差別されており、宇宙の只中での宇宙遊泳だ。観念は自らの究極の実体性を世界において確かめる術をもっていない。その限りで観念は不安定である。観念は自らの出自であるようなものとして、自らと世界とがそこから出てくるようなものとして、観念ではないもの、普遍的な、抽象的な、絶対的なものを自らの世界の外にもつ。それが本来の宇宙と云うことだ。宇宙が人類を予定していたかどうかと問うことは無益である。宇宙は、原因でも、彼岸でも、母胎でも、虚無でも、何程か規定されうるものですらもないのだ。或いは、それら何れでもある、と言っても所詮変りぬ。肝心なことは、唯一の事実を確認することである。全ての偶然と必然とはこの事実から後に生じていること、この事実こそが人類と云う事実であること。観念は意識を下置させ、意識をその素材としている。意識が観念の中で時間性によって反照することが記憶である。記憶とは意識が意識によって媒介されゆくことだ。このように徹底した意識は、あくまで二元論として自らを固執し、そのことによって宇宙から出てきてしまったのだ。意識は今や自然を自然としてその対象とする。自然とは意識によってみられた宇宙、すなわち宇宙の仮象である。従って、自然は現象であると言われる。

（時間、空間）

意識を意識する意識が、その無限性において素材としての意識とは区別されており、素材としての意識の交替に拘らず自らはやはり無限性として在りつづける、と云う自らの自己同一性＝恒常性をまでも意識しきったとき、観念は意識のこの連続性＝非連続性の只中に生じてしまっている。

観念は、この連続性＝非連続性を、時間＝空間としてまず経験し、次に観念は、自らの同一性から反照して意識をそのようなものとして意識するこの二つの契機、時間と空間と、を析出するに至る。時間と空間との根源は当然同一であり、「かつての吾」の意識である。即ち、意識と、意識を意識する意識と、のずれの意識である。観念が自らの同一性に基いてこの時間＝空間性を構造化するとき、これが世界である。このような観念であってはじめて、世界の内に在る。人は、このように構造化された世界の観念としてのみ、人である。観念が知るところのものは世界であり、観念の知らぬものが宇宙である。世界は宇宙に属しているが、観念は宇宙に属しているのではない。観念が知るところのものは、宇宙ではなく、範疇の檻に入った自然である。宇宙はどのような範疇の檻にも閉じこめることはできない。宇宙は客体であることを拒否する。宇宙は実在性の根拠をなす無規定な海だ。世界は、これに反して、時間と空間という延長の形式における構造化された統体である。さて、この時間性とは観念の生と死とである。自然という意識においてみられた時間性は生成と死滅とである。人類とは自己保存し展開する客観的な過程である。人類にとっては、生と死と

は一如であり、人類における時間よそのため円環していく。死が突出するのは個体においてだけであり、このことによって、死を知った個体が動起するとき、人は人でありはじめる。個体の死が精神のはじまりであるとはこのようなことだ。死に向って覚醒した個体という精神のみが自らを担う。こうして個体は自らを唯一つの世界の頭脳として自覚する。しかし、個体はさしあたり類から動起することにおいてのみ個体なのであって、観念は、まず類としての人類としてはじまるより他はない。

ただ単に規定されているにすぎないような観念は、まだ単なる宇宙の内面性にすぎない。しかし、観念はこのようなものとして在るにとどまる限りでは、たちどころに観念であることはなくなってしまふ。観念は、決して状態ではなく、能動態であり、むしろ志向性である。観念は自らが自らに対する規定性から超出していることを証示するため、かえって自らに規定性を付加することさえする。このように観念が自らを志向づけることは、観念のまず最初の内容であった自然性にとって、自然性が観念へと訪れること、即ち観念の貧血あるいはロス、が外的規定性によって抑圧されることと決る。ここでこの自然性を主語として語れば、フロイト説話となろう。観念が意識の只中から自己意識と云う形で自らを現わしたとき、その観念の内容はまず動物的一元論の自然過程以外のものであることはできない。しかし観念は、自らを、自らの内容から徹底して区別する。全ゆる対象性がまだ単なる自然である中で、この観念だけがそれら自然の自然性の絶対の否定、絶対の他者であった。そしてまた、観念は、自らが自然的な内容の単なる形式として規定されることにも抗して、観念は、自らの内容からの自らの区別を客観性へともたらし、他方で観念自らの内容をも自然性と区別されたもの、自らの形式と一致するもの、へとひるがえって逆に規定しゆく動態である。ところが、観念が自らの自然性に対抗する意志性として顕示することにおいて顕示されたこの客観性（対象性）から観念は自身をまた区別するような無限性であり、このことによってこの客観性は第二次的な自然性あるいは慣性へと転落している。この無限の過程は、観念の無限性に照応する観念の動態の展開としての観念史あるいは人類史を形成する。この歴史において人類がまず産みだした普遍的な客観性とは、言語、親族組織、タブー等の人間的範疇の諸形式であった。

（言語）

人類が言語を産んだとき、人類は人類である。意識は意識を言語として世界の内へ留めおいたとき自ら観念であることができた。この観念は、しかし、自らの実在を確認し自らとしてありつづけるために、自らの内容である意識を自らと区別されたものとして排出しつづけるなければならない、ことばを吐きつづけるなければならない、故、意識を裏切り、殺し、征服しつづけることに拠ってのみ観念は観念である。人間がこのようにして人間である仕方が、話す＝離すことである。

このとき、言語は意識の肉体である。語は人間的範疇の元素である。従って人間は言語より以上の具体者を知ることはできない。労働はこのようなことばを産む仕方の一つである。文明は言語の体系そのものである。始源の言語において、語は泥＝自然の只中で構造化された世界を構築する原形であると同時にその漆喰＝内在する論理でもあった。言語は人間個体の知る唯一の客観性である。客観性とは、観念における他者の形式である。言語は個別者と普遍者とを媒介することであり、すなわち範疇である。言語は人間的範疇一切を司る。ところで唯物論と観念論との古典的な対立は存在の勘違いだ。存在論はきまって形而上学であり、思弁学である。科学もまた然り、就中、存在と云う範疇は人間的範疇である限り歴史的な、あるいは、地域的な範疇である、すなわち時空の内で規定された範疇である他はない。存在そのものの歴史を識る必要がある。民族学は、未開人にとっての存在（靈魂）が近代人にとっての非存在であり、近代人にとっての存在が未開人にとっての非

在であることを示した。これは実在性の相違ではない、範疇の相違だ。意識される存在としての存在はこうにすべからず範疇である。

我來りて物を照す
我來りて萬法を證す

(論理)

論理の帰属在処については経験論は無頓着である。経験論が真理認識の形式を a priori と見做するとき、経験論は改竄をきたす。というのは、経験論が先験性を持ちだすとき、そこでは、一方で真理が対象の実体に帰属すると言表されるのに対し、また他方で、真理が真理として認識されるのは、まさに真理が真理である故にばかりではなく、むしろ主観が真理を真理であると認める能力を未生より備えているからである、と主張されるのだ。ここで経験論もみとめていることは、宇宙を主語とするとときそれが論理である、また、論理は人間的範疇をまとい、規定されることによってのみ人間的真理として人間にあらわれる、と云う二つの事実に他ならない。それだからこそ真理にも歴史があるのだ。

宇宙は万物の隠れた主語である。ところがこの宇宙を素飛ばして主語を自然と云う人間的範疇におきかえてしまうと、自然弁証法と云う今様神学が造成される。構造主義は、この人間的諸範疇を客観性としてとりだし、論理の人間的形式の普遍的形態を析出せん、とする科学主義の最良最后の方法である。したがって、構造主義は地理主義の対極である。構造主義は、まず言語学から出発し、親族理論へと展開したが、これは、言語が人間的範疇の規定性を司るものであるからに他ならない。人間的範疇とは、時間、空間、数、名称、形状、音、その他の諸抽象である。範疇は世界の構造を綴りなす。範疇は不可視物を可視物へと変換する。それでは、数のような何らの実体性をもたない抽象的な概念が一体どのようにして生じたのか、これを見極めることはいかにも困難だ。しかし、多くの言語で、数詞の形成が特定の身体運動による命名法から発していると云う事は注目に値する。大抵の民族の数詞は、手の指を折りまげたり差したりし乍らその部分の名を唱えていくことから生じている。例えば、西イリアンの山岳部族マネオキン族の計数法は次のように行なわれると報告されている。

ホーム	1
・ 左手の小指を右手でつまむ	
ホーム, ホーム-ホアイ	$1 + 1 = 2$
小指と薬指をつまむ	
ホアイ, ホーム-ホメ	$2 + 1 = 3$
小指と薬指を束ね、中指をつまむ	
ホアイ, ホアイ-ホク	$2 + 2 = 4$
小指、薬指を束ね、中指と人差指を束ねる	
ホアイ, ホアイ, ホーム-シルケン	$2 + 2 + 1 = 5$

小指と薬指、中指と人差指を束ねて親指をびくつかせ左腕を右手で叩く

この後6以下は右手の親指から小指まで引き続き数え、更に左足、右足と数えて、最後にシルケンと叫んで両膝を打つと20を数え終る。それから先は、ない。20まで満足に計数できることはマネオキン族では一つの威力であって、副酋長になることができる。この通りに二十進法で手足の指を計数に用いた名残りである。このように、人間は自らが規定されているようにしか宇宙を世界として

規定しゆくことができない。したがって、人間に対する規定性、さしあたっての身体性あるいは心的な自然性、が全ての人間的範疇の基底となる。それ故、人間が身体性として等しく規定されている限りで、範疇はどのように個別発生しようとも互いにその構造は驚く程似通っていることになる。数えるという動作なしで数の概念が成立しなかったように、思考においても、われわれの多くは各自習慣的な身体運動なくして考えることは難かしい。また、形状という範疇は眼球の運動ときりはなせないものであって、眼球の運動がなければ輪郭を表象することができぬ。夢をみるときでさえ、眼球は必ずしきりに運動するのである。原初の言語はいずれも恐らく数百より基本語彙をもたぬが、これらが言語の範疇をもなす。カテゴリーとしての言語は概念と言っても宜いので、例えば、太陽、夜、水、人、血、骨、肉、草、土、木等々があらわれない言語は考えられぬ。人類はまず互いに区別された個々の群れであった。それらの群れにおいて、言語という普遍的なものは特定の言語として形成された。これら諸言語の諸カテゴリーは当然に喰いちがう。しかし、範疇の普遍性とは、個々の範疇が互いに一致することではなくて、それらの組み立てが互に対応することである。範疇の普遍性とは、例えば、ある言語は全ゆる可能な音の中から全く任意の音を自らの音素としうる、と云うことでなく、全ての言語は全ゆる可能な音の中から必ずある音を音素として、例えばアイウエオとして選ばねばならない、と云うことである。かくして、言語及至は人間的範疇、つまり謂わゆる集合表象の生成は、一つの全く客観的な過程である。原初の範疇は、今日の分類では呪術体系と呼ばれるような観念複合に属する範疇であったはずだ。さすればそうした範疇による分類は、当然近代の分類とは異なる。例えば、近代の分析的範疇は、死を自然死として他の範疇と分離しているが、原初においては、死の範疇は、悪霊、禁止、その他の不可視物、と云った他の範疇と密に結びついている、あるいは、原初においては近代的な死の範疇は成立しない、と言っても同じだ。そのために、侵犯すれば死に至るであろうと信ぜられている禁止を自ら犯したと知った途端に当人が絶命してしまう、とか、呪詛されたと知ったことによって死んでしまう、とか云ったことが容易に起りうる。こうしたケースの生理学的な可能性については大脳生理学でも精神身体医学でも説明することはできよう。しかし、生理学という科学では、ある範疇が他の範疇と結びつきあるいは結びつかない心的必然性を了解することはできない。結びつく二つの範疇は、原初においては一つの範疇であるはずだし、あるいは、近代の側から言えば、その一つの範疇から発生したいくつがの範疇が相互に思いもかけず融通無碍であると云うことだ。これが融即 participation と呼ばれるものの正体である。

(食人俗)

北京人、ネアンデルタール人等の旧人や新人の一部、また日本では三ヶ日人、縄文時代人等に食人俗 cannibalism が広汎に行なわれていたことは、明らかな事実として報告され、認められている。

食人は食糧欠乏の結果と解するよりは、むしろ、倒した敵の頭部とりわけ大脳を食することによって故人の備えていた威力を継ごうとしたものと解する、というのは、南海諸島の実例も後者を支持しており、また、頭蓋骨を呪的威力ある盃として首長がしばしば用いる各地の例にも拠るのである。ネアンデルタール人骨は、明確に埋葬されて発見される最も古い時期の人骨でもある。食人俗では、脳という可視物と、威力と云う不可視物とは、融即しうるのだ。食人俗から、その人類の範疇の分化と結合の水準が推論される。観念においては世界が成立しているが、観念の下で意識は範疇の意識である。観念は言語において意識を話す=離すが、観念が統体である限りではなされた意識も統体でなければならぬ。これは、意識相互の連関ないし媒介過程として、あるいは範疇の融即において表われる論理として、すなわち語と文法として外化せられる。語は延長を寄せつけぬ。

したがって、はなされた意識における観念の時間性と空間性と延長の形式は、まさに語の結びつきにおいてのみ生じる他はないのだ。かくして、どのような言語においても、品詞、主語と述語、活用、などの文法存在は普遍的である。原初において、言語は、範疇を確定し世界を構成する唯一の媒体であり乍らも、言語で世界から区別された独自の実体性をもっていたにちがいない。語は、意味されるものから分析的に区別された単なる意味するもの即ち記号、としては未だ十分に結晶しておらず、語は事物と全く同等に並立するような自ら独自の対象性をもっていた。それは、言語が生成する場合、つねに群れの客観性においてだけ生成することにより、何よりも個体にとっての外的規定性でありかつ外的実在性であったからだ。個体にとって語が自ら主語となることは群れのどの個体にとっても普遍的であるから、個体の心性が群れにおける範疇へと客観化される。これがことばの呪力だ。命名は普通名詞を固有名詞へ移行せしめるが、これと同時にその普通名詞と連合する属性も命名される個物へ規定性として付着すると考えられた。命名あるいは名称と、命名されるものあるいは名ざされるものとの融即。それ故にまた、本名を知られることを怖れるさまざまな禁忌も存在する。本名を知ることは呪文に決定的な威力を付加する。更にまた語は連想類似等に依ってあらゆる近縁を相互にとり結びゆく。このように言語の輪郭が不分明であることは、範疇が不分明であり融即することと照応している。主語と述語との融即が切断され、主語と述語とが相互に輪郭を固め反撥し合ってようやくはじめて、主語と述語との間にコブラあるいは媒語が自立語として生成してくる。だからこそ、そうなる以前の段階にあたる多くの未開語は être に相当する媒語をもたぬのだ。幼児においてすら単語よりも文の方が先行するではないか。

(性的牽引と反撥)

言語は群れの中で生じた。そのとき、ある個体にとっての絶対の客観はまずこの群れであった。ところで性は自然における生＝死の形式であり、生＝死であることにより時間性の、番であることにより空間性の、根源である。個体も、観念も、この時空を通過することにより出発する。だから群れは血縁体としてはじまる他はない。この群れは、その群れをなすどの個体にとっても客観性であることに拠って、個体を個体として逆に規定する。この規定性が役割だ。血縁体の役割は血縁関係において示される。さて、個体がこの自らへの規定性を覆すことで、群れの客観性そのものを危くすることある。母と子、父と娘、兄弟と姉妹が、思いもよらず結び合うことは、群れの範疇を解体し観念を自然へ溶解させる。つまり、近親相姦は文明そのものへの敵対である。それに抗して、群れにおける言語が個体に対して心的な規範力に転化する。これが掟だ。精神は近親憎悪する。話すことをする観念は、最も身近な故に最も自然である近親への性的意識を離すことをする。これが笑いだ。自然性からの分離を志向する人間だけが、近親相姦を禁忌とし、かつ、笑うことをするのだ。近親相姦の禁忌は人間の文化の原基だ。

(血縁と社会)

近親相姦を禁忌する観念の志向性は、群れにおける客観性あるいは文化として保障されるためには、近親相姦の禁止及び婚姻規則と云う規範として、或いは、氏族、半族、及至婚姻クラス等を伴う親族組織として、自らを実現しなければならぬ。このようにして、群れが社会に、性的牽引と反撥とによって染めわけられた同族と異族とに、自らを分割する。

血縁体がこのように分裂することは、群れにおける観念にとっては、自らの内容である一切の範疇が、世界内のありとある事物事象が、性的牽引と反撥とによって、性的なあるいは親族的ないくつかの大範疇あるいはジャンルに分裂してしまうことでなければならない。ここで一つの分類が成立している。印欧語族の言語に一般的な名詞の「性」は、この分類に由来するものだ。群れは、いく

つかの親族組織を下属させる部族として、自らを組織する。この部族あるいは人類から自らを区別する親族組織、部族の婚姻の規範によって規定されている親族組織が、自らの性的範疇、自らの共同性、自らの同一性を、自然的諸対象主として諸動物のいずれかに対象化し、表象し、そのことによってその動物と親族組織とが一つのジャンルに融即しているとき、その諸動物はトーテムであり、その部族はトーテム制の許にある。オーストラリア体系と呼ばれるトーテム制では、自然界は、トーテムである自然的諸対象のとりむすぶ親族秩序体系として表象される。トーテムは、サブトーテム、そのまたサブトーテム等を下属させたジャンルを形成しており、汎そ自然界の事物で何らかのトーテムと血縁をなさぬものはないのだ。オーストラリア体系は一つの完結した分類体系であって、そこでは、トーテム同志も、トーテムと人間とも、トーテム制社会での人間相互間に生ずる性的索引反撥の法則と同一の法則の下にある。オーストラリア体系は事物と人間とを共通に範疇づける一貫した分類体系である。従って、近親相姦の禁止は、自然と人間とのさまざまな関係の場面での禁止へと直接に融即してしまう。例えば、さまざまな食物上の禁制、接触の禁止、儀礼の際の規範などへ、である。こうした分類体系は、全自然を親族化すること、そして、最も身近かなものを禁忌すること、なのであるが、分類がまず森羅万象が親族組織をかたどって分類できるという信念として示されたことと云うことで、人類にとって第二次的な規定性である親族と云う規定性が、文明にとっては第一義的な規定性である、と云う事実を示すものである。蓋し、分類は論理の出発点であり、文明の形態であって、分類できるとは、わけが分ることに他ならない。わけのわからぬものは、観念の他者あるいは体系の侵犯者であることに拠り、グロテスクあるいは穢れの範疇を形成する。トーテム親族がそれに属する個体に対して及ぼす規定性は、トーテム動物の威力としてある。トーテム親族の構成員は、自分達を、人間の嗜好をしたトーテム動物たとえばコンゴウインコであると思っていることもある。トーテム制のもとで、個体が、ただ単に規定されているだけではなく、自らの独自性を表示したいと思うとき、それは個人トーテムとなってあらわれる他はない。このトーテムは個体独自の威力の源泉であるとともに禁忌の対象でもある。個人トーテムがないところでは、個体の命名において名称がそのかわりをし、呪力をもつ。個体が真に自立した独自の存在となる時、即ち成人式においては、個体は正式の名を与えられるものだ。

(アメリカ体系)

民族学者によってアメリカ体系として分類されている北米原住民の間では、更にすすんだ分類体系がみられると報告されている。即ち、トーテム諸部落の空間的な位置関係が、時空範疇へと析出してきているのだ。

グエブロインディアン、ズーニ族では、部族を構成するトーテム諸部落と森羅万象とがやはり一つの整合的な体系の許に整序されている。ズーニ族は七つの居住区に分かれて位置し、それら居住区はほぼ三つずつのトーテム部落からそれぞれ構成されている。世界はそれに応じて、北、西、南、東、天頂、天底、中央として空間分割される。この内、天頂、天底、中央は新しく加わったジャンルであるので、それ以外の四つの分類を見るならば、大体
北一風一冬一戦争、破壊一黄色一くまトーテム
西一水一春一平和、狩猟一ブルー一草原犬一トーテム
南一火一夏一農業、医業一赤一あなぐまトーテム
東一大地一霜一呪術、宗教一白一七面鳥トーテム
のようになるであろう。ズーニ族の分類体系では、近代の範疇では相互に無関係であるような方向、元素、四季、職業あるいは気質、色彩、動物、親族、を貫通する大範疇による分類が成立して

いるのだ。特にオーストラリア体系と異なるところは、時間あるいは季節が空間と結びついたまま各方向に分類せられていることである。ブーニ族の空間概念は、各トーテム部落の実際の位置関係と同定している。自然界の諸事物はトーテムとの類縁関係でその配属が全て決定されている。また、スーインディアンの諸部族の場合は、部族を構成するトーテム諸部落は環状に野営地を設営するのであるが、この設営場所はトーテム部落ごとに中心からの方位が一定しており、これがスーインディアンの分類体系のジャンルを構成しているのだ。トゥモロコシなどの原始農耕を営む北米原住民では、円環して元へ戻る時間流が発見され、四方向へと分類されている。これは暦法、あるいは自然的時間の人間の範疇、のはじめだ。このような時間、空間分類の更に発展した例は、天文、地相学、占星術、算術、等々よりなる易学において見出すことができる。中国ではトーテム部族組織は全く見出されていないが易学は大発展を遂げた。中国の分類では、時間と方位とは同一の名称、即ち十干十二支で呼ばれる。その他にも

青竜（東—青—春） 朱雀（南—赤—夏）

白虎（西—白—秋） 玄武（北—黒—冬）

と云う四季、色彩、方位のジャンルがある。暦法は文明のもつ時間の尺度であり、文明自身の尺度でもある。大範疇によるこのような時間空間分割は呪的心性の内でしか存続しない。

（体系構成）

体系は時空ないし世界を構成する観念の仕方であり、世界了解である。体系は通時的に展開しはする。歴史的ではある。しかし人類は何時でも共時的に完結した、安定した観念複合へと全ゆる意識を整序していなければならない。この整合的な観念複合とは上部構造なのだが、下部構造はもしあるとすれば絶対に無規定なものとしての宇宙である。

（呪術体系）

観念はまず第一に呪術体系を組織する。この観念は未だ事物と観念とを十分に区別しておらず、観念は自らが目に見えぬものであることを十分に気付いてはいない。ために観念は自然的諸対象の中に見えないものを見てしまう。かくして、呪術体系においては世界は神秘に鎖されることになる。

呪術体系においては時間性の範疇も空間性の範疇も混沌としている。世界は時空の内へ自らを構成しきることがまだできていない。世とは時称の一切であり界とは領域方位空間の全てである。世界は未だ宇宙の母斑を纏うている。時間は連続持続として熟さず空間は方位他界を分節外化しておらぬ。農耕以前の採集は大体このようである。時間性の混沌は因果性というカテゴリーを成立させない。原因と結果とは全く脈絡を欠き、ある事象とある事象との因果は成立していないともみえ、またある事象はありとある事象と因果をとり結ぶともみえる。あるいは時間的な相互継起が必ずしも原因—結果系列として結びつくとは限らない。このため後から起った事象が先に起った事象の原因であることもできる。これはもはや原因が結果をもたらす因果性であると言うよりは、諸要因の暗黙の符合を導いている必然性であると言った方が宜い。従って、あらゆる現象は、目に見える因果連鎖を超越しなおかつ必然的でなければならない。不可視物を事象の原因あるいはむしろ本質としたことは、たとえば、感冒の本質を、かぜ（すなわち実在なきもの）と言うことにおいても示される。今日多くの人はビールスと云う科学的実在を呪的に信じているにすぎない。日本では、不可視の実体、ないし威力の原泉として知られるのは、ものである。不可知不可視の超越的媒介もしくは必然性の残滓は、噂が噴嚏を呼ぶ等々の俗信、禁忌、忌詞などとして教えられぬ。前後脈絡のない外部刺激をまで全てストーリーに組みこんでしまうあの起きがけの悪夢の柔軟性を想い起すがよい、すべての与件を必然の形式にもちこむために体系はグロテスクなものとなるかを。しか

し、自然現象を必然性として措定することにおいてだけ、観念は自らを自然から差別したのだ。自然の混沌の裡に自らを韜晦させる自らの自然性にも抗して、観念は自然を何らかの論理のもとに持たねばならない。そのため、北米原住民の部落では、深夜隣人の住居の傍で鳥あるいは不吉な鳥が啼けば、その隣人を殺害せねばならなかったと云う有名な例が生ずる。偶然があってはならないのは、なんとしても体系がなければならないからだ。また、呪術体系においては、個別の事物はその輪郭その実在を明確とせずそれは可視物であると同時に不可視物でもある。対象はいわば分離する以前の個別性と普遍性として出会われてしまう。況そあらゆる狩猟民族で獲物である動物の靈魂をまつる祭儀を行なわない民族はない。殺された獲物は賓客として遇され食物などをすすめられ、もしや氣を悪くでもしてこの次に狩猟を失敗させることなどないようにと慰勞される。つまり為留められたクマはこの横たわった屍であるクマと云う個物であると同時にこの次に捕まるクマあるいはクマ一般でもあることができるのだ。呪術体系の論理は特殊性の概念を欠いており、呪術体系は体系としての分類体系を備えることができない。このような呪術体系は原初の客観的観念の全領域をも蔽う。政治、法は言うに及ばず文学、商工業等々のすべては呪術体系ないし呪術性を通過してくる他はない。

呪術は人間の観念的な力の支出、観念的な労働である。すなわち、呪術とは、呪詞呪儀呪薬等々に依って、呪術者の意図にとって好ましい結果を抽出さんとする試みであって、いわゆる共感呪術の類似の法則あるいは接触の法則、即ち範疇の融即を呪的威力の回路として呪術者自身の意志を外化し客観化せんとする試みである。言いかえるなら、呪術とは、観念が現象の自己原因であらねばならないと云う固い信念であり、自然と観念との親和性ないし血縁性を期待し希望する一つの表明だ。或いは、観念の自然に対する直接的な支配力を確信すること、恣意の優越性をただ無内容に確信すること、であるのだ。つまり、呪術とは、念力信仰である。呪術的心性は至る処にみられる最も自然的で素朴な初発の心性だ。呪術的心性がこのように自然から突出していない度合に応じて、呪術は観念と自然とを範疇の上で区別することもない。そのため、呪術体系では、呪術者にとって及至社会にとっての善い現象には善い意図が、悪い現象にとっては悪い意図が、先行していたことにならなければならない。かくして人々はさまざまな目に見えぬ善い意図と悪い意図との只中に置かれ、それらの意図に対する不断の疑惑に脅かされる。しかし、どのような悪い意図に対しても、呪術的心性はできれば前もってその悪い意図の呪的威力を無効としその顕現を遮断するような逆呪法を案出せずにはおかぬ。呪術は、善い呪術、悪い呪術に分割され、呪術の失敗自身も呪術によって説明されうる。呪術がこのように完結することに拠って、呪術体系は体系であるのだ。だから、呪術は、素朴な観念の自己防衛機制としても機能する。人間という観念は、呪法をもつ限りで発狂をも免れる一種作業療法を受けていることになる。呪術的心性では、ある結果をのぞむこととある結果を生ぜしめることが十分に区別されていないのだ。と云うことは、意図と意図された結果との媒介をなす技術が概念としても成立しておらず混沌としていたことと照応する。呪術は、現象を一応は発見しはしたのだが、その演出者を発見しはしなかった。呪術的心性にとっては、自らの孤独よりも自らに対する敵意の方がまだしも快いものであった、と云うことにすぎない。呪術体系は、観念が現象の自己原因である、と云う呪術の本質を実証し、自らを体系として確認し維持するために、妖術者の探知、あるいは穢れである破戒者の探知を、呪術またはト占と云うやはり超越的な手段で行う。あるいはこれは、悪意を怖れる観念が自らの怖れを呪術体系のもとで客観性へと表現したものである。発見された妖術者容疑者等々は、思わしくない出来事を惹き起こしたかどで、呪術にか、物理的にか、制裁を受ける必要がある。死も同様に思わしくない出来事の一つであ

る。呪術的心性は人の死をどのような場合にも宿命として認めているとは限らない。死も人間の範疇である以上は歴史的だ。呪術体系においては、死も所詮悪意が育したものであるにすぎない。即ち、死はそれが目に見えない場合謀殺ないし呪殺である。従って人がそのように死ぬと、卜占に依って犯人の決定が行なわれる。死者の縁者がこの犯人に復讐する。このような呪術体系の許で、観念は自ら人間が端的に死ぬものであると考えられてはいない。こうして、自死に対して覚醒していないような観念は、未だ無規定な個体、個体になりきっていない個体としてのみあり、そうした観念は、自らを集合表象から区別し切断しても、なお自らであるようなことができない。群れを離れた個体は、自らの規定性からも離れることによって自らからも離れ、入眠または沈黙そのものと化し、人格潰瘍を経て動物生へ没落するのみである。呪術体系においては、個体の存在がそもそも何ものかの比喩であるにすぎない。従って、個体は、呪詛されたと思ひこむ丈で、何うそれに抗することなく、直ちに自らの死を融即させてしまうことができる。かくして、呪術で素朴な心性の自然的な表現であったが、呪術体系の観念の自然性からの飛躍度は、それが自らに飛躍として自覚されてはいないが故に、極めて僅かである。故、呪術的心性にとつての世界は、抽象への振幅がない混沌であって、因果系列が超越的に多元的に錯走する呪力集積回路である。この世界の混乱、完成しない及至は失敗した体系、構造化分節化されざる世界を堪えることができるのは、死を知らぬ観念のみである。それと云うのも、呪術体系において、個体の規定性は必ず外部からやってくる他ないからだ。従って、呪術体系においては、個体の倫理道徳規範の類いは、必ず禁止と云う客観性としてのみ、個体の外在的な規定性としてのみ、存在する。

観念が、ひとたび死を自らの必然とするや、存在は偶然となる。観念の混沌の危険が世界の混沌にとってかわる。観念が、自らを現象の内に直接的に実現し反映させようとする呪術を離れ、自らを只観念の内に客観的に実現しようとするれば、それは、宗教と言って宜い。宗教は観念の二重性である、それ自体観念の内容であるところの世界についての更なる観念である。かくして、宗教は宇宙論であり、宗教の内では、観念は世界（この世）の内であることを辞めた後も永遠（常世）に存在できる。宗教は、観念自らが整合的であると云う観念の確信である。この宗教の整合性への志向は、個体における個体の死の覚醒により胎動しはじめる。呪術的心性は、また、自然に対する人間の関わりが直接性（無作為性）から媒介性（作為性）へ、つまり、採集から農耕へ、更に進んだ農耕（自然における生と死と再生と）へ展開するにつれ、徐々に宗教性へと変容しゆく。

（神話体系）

観念の宗教体系は、まず神話体系である。観念が単に自然死してしまうにすぎないものと観念が自ら悟ったとき、観念は、自然的な身体、自然的な諸対象、自然的な諸現象等々の個別的であるにすぎないものと同列におかれてしまい、観念は、自らがそれ等と同じく滅び去ってしまうものであることに愕然とする。観念は、自らの紡ぎ出す時空性の範疇によって自らも絡みとられてしまったかのようだ。しかし、死に対して覚醒した観念が、ここで自然の不連続性（軀）に対抗してどうしても自らを連続性（魂）として客観化しようとするとき、それは、自然の外に、あるいは観念の及ぶうる限りの時空性の更に遠隔に、ある連続的な人格として表象され指定される他はない。このようなものが、神だ。

神話体系では、まず、呪術体系におけるさまざまな善意悪意が彼方へ人格化されて神々となる。神々は人々と同じく血縁によってのみ結びつかねばならない。神々を存在者たらしめる規定性は、やはり外的血縁であり、このことから神々は親族関係をなすが、それを示すものが、神話である。神話は伝承される。神話は伝承以外のものであってはならぬ。神話は、宇宙の表象であるところの永

遠をかたどった言語を、語る＝騙ることではなければならないからだ。伝承のもつ時空は、個体の観念の時空を包括しそれを超越する仮象をもつことにより、個体の観念が死後その伝承の時空へと還りゆくことを可能とするのだ。神話体系は、人類に、呪術体系より一層明確かつ堅固な存在証明を与える。神と云う人格は、何よりも、自然と観念とを含み、それら兩者よりなるこの世界、この世界にも先行するところの別の観念でなければならない。この世界は、神の肯定的な意志によってはじめて現存を許されたのでなければならない。このため、どの神話も創世神話をもって始まる。神が自らから世界を創造した、と創世神話は告げる。世界の時間は当然この後流れはじめたのだ。ところが、このような神話形成とは時間逆行であり、現場の時間流を押えつけ捻ぢ伏せ逆転させることである。神話的時間は、人間の範疇の自己展開、観念の自己展開を全く逆さにたどるものであり、このことに拠って、神話的時間も神話自体も円環しており、自同的であり、自己完結した統体すなわち体系をなす。人類は、ある種変道具の手造り技術を発達させた時、自らの手造りで死ぬものが眼前することに気づき、驚嘆し、これを人類の他者＝神の手造りになるものと判断したが、その時人類が失念していたのは、人間が眼によって見えるものを造るという事実であった。創世神話の本質とは、言語がまずもののものを指定したと云う事実を告げることには他ならぬ。創世神は、神々の父祖であり、自体存在者であり、絶対の威力であり、即ち宇宙乃至宇宙の仮像だ。このように、神は宇宙（一元論）と世界（二元論）との媒介者である。神のこの媒介活動とはまず創世であるが、より明確に宇宙と世界とを媒介するものは、神の降臨または聖霊の降誕である。人類の始祖は、神であるか、神に造られるか、神から産れるかする。さて、神話世界において、種族の始祖が、兄弟相姦、母子相姦等の近親相姦を犯す例がしばしばみられる。これは、神話では多く種族維持のためのやむをえざる状況の故であると説明するが、ここには、この世での近親相姦の禁止を逆に表現するような、或いは、種族の純血性を単一起源として証明するような、二つの機能が働いている。神話をもって直ちに歴史的乱婚時代を言うことには意味がない。

神話体系においては、観念は自らを自然よりより遠隔な神話世界において表現した。するとこの世界は、神話による時間の逆転に拠って、あの神話世界の外の世界、あの世界から産みだされた世界、すなわち神話世界の時間と空間とによって外的に規定されたものとしての世界であることになる。従って、神話体系の許にある社会にあっては、世界の時間は神話的時間と接続しており、それは祭儀に示されている。祭儀の時間は円環しゆく時間であり、ハレとケとの無限交替であり、自然の鼓動である。ここでは、時間の進行を含め自然の運行の一切を司るものは神話的世界の神々であり、祭儀において神が人類に合意する限りでのみ逾越しはなされる。かくして、世界の演出者は神である。神話体系における観念にとっては、むしろ神は世界の平穏な運行を人類に保証するものでなくてはならぬ。祭儀とは、創世をかたどる、乃至は世界を現に存するままに再び指定し直す、乃至は世界の平穏な運行を保障する、そうした内容を演ずることである。そのためには、祭儀とは、人々が神々を演ずることではなければならない。祭儀では、特定の個体が神を演ずるが、その場合は神がその個体を演じていることと区別がつかない。演ずることは、すでに幼児の心性において普遍的である。群れにおける血縁と社会の規定、つまり役割、を自らの上に仮構することに依って、幼児は遊戯する。これが、ままごとだ。また、例えばかくれんぼは誕生を演ずることである。ただし、幼児においては、しばしば相手の役割まで区別なく融即されて演じてしまうため、飽和してしまうと云うことも起る。鬼にみつかる前に跳び出すこと、或いは、破局への願望。演ずることとは、無規定な者が規定性を自らの上に纏うこと、即ち、無作為と作為との融即によって成立する。従って、祭儀が祭儀である以上は必ず個体の時空あるいは観念と神の時空あるいは観念とは融即することが

できなければならない。このような個体は、呪巫である。呪巫は、世界の演出者である神を演ずることに依って、世界を演出する。呪巫は伝承に拠らず現場での宇宙あるいは神と世界あるいは人との媒介者である。神話における対立の形式は、Chaos と Kosmos との対立である。Chaos は宇宙の無規定性であり、Kosmos は人間的範疇の体系性だ。神話においては至上神たる創世神が Chaos の只中から Kosmos を創出したと云う発生が述べられる。このことから、一切の秩序の内容が創造神に発し創造神に属することになる。Kosmos があくまでも観念にとっての依るべき Kosmos であるためには、神々がもはや血縁によって外的に規定されていることは許されず、神々が単一の神へと整序されて行くのでなければならない。つまり、創世神ないし至上神そのものが Kosmos の実体であるのではなくてはならない。このように、神話体系が至上神のもとへと組み直されること、これが、自然宗教から普遍宗教へ（そして一神教へ）の過程だ。

（宗教体系）

宗教とは、re-ligio すなわち、再結合である。宗教体系における観念は、世界の自然的過程をもはやどのようにしても神的世界と連続させることはできなくなっている。創世は至上神の手で唯一度なされ、至上神はその後もはや世界の自然的過程に直接手を触れはしないのだ。神々のものであった権力は至上神の手に集中され、至上神が Kosmos の実体であるばかりに自然は魂を抜き去られ即物化しはじめる。宗教体系においては、他界あるいは観念世界は自然から截然と区別され、観念自体として秩序づけられている。と云うのは、宗教体系における観念は、呪術体系における観念に比べそれ丈挫折しているからに他ならぬ。だから、観念は、個体の死を完全に自覚し自らの身体を自然の範疇へ押しやることに拠って、自らは靈魂として他界に安らわんとする。従って、宗教体系は徹底して二分法 dichotomy であり、一方で観念は自らに対する具体的な眼にみえるこの世界の内での規定を全て仮象へと貶め、他方で、観念は自らと同じく抽象的で無規定となった至上神と無時間無空間の他界すなわち宇宙において邂逅せんと試みる。

宗教体系において、観念は自らが目に見えぬことを熟知しており、それ故に可視物一切の無を発見している。宗教体系の発見する無とは、観念が自らに降りかかる規定性に対して抱く否定の熱情の表現である。この観念のニヒリズムは、しかし観念自らの外的世界に対してだけ向けられるにすぎない。現世と来世との二分法は、現世（俗）へのニヒリズムと来世（聖）への愛とを一つのことでする。部族を征服し解体し版図を拡大した帝国は、必ずこのような普遍宗教を伴った。というのも、帝国においては、観念が、文化共有体であった部族での類の過程へと、自らの永続性を継承することはもはやできない相談だからだ。かつての部族そのものが、帝国の許で、郷土を追われ、あるいは絶滅せられ、あるいは四散せられ、あるいは変質せられねばならなかったのだ。帝国の成立しない日本それも特に北半部のような地域で、祖霊神信仰は普遍的であることができる。このようにして、観念は最終的に個体へと切り離され、個体は自らの観念的な死として死と直面した。この抽象的な個体の死を補填する永続する観念の理念あるいは仮象が、唯一神だ。観念が、自らの理念として自らより自ら疎外したこの自らの他者である神と、観念自らと、この実は同一である両者の分離と再結合との主題は、愛、或は観念の自己愛、の主題であり、宗教体系の全過程は、この主題に従って観念が自ら自身と再結合するに至る弁証法的運動の全過程である。宗教体系は、だから、土俗と離隔すればする程より透徹した体系を備えるようになる。土俗との離隔が信仰のニヒリズムを募らせるのだ。信仰と云う観念の志向の形式は、向き合う意識であり乍らその対象性あるいは客観性の内に自らを丸ごと見出し、そのことに拠って主体としての自らを空無なものとし、その内面に何の実体も遺さずあるいは実体としてみられた対象性の仮象として以外に自らの内面をもたな

い、と云う神の反映論神の一元論を主張する二元論であって、信仰にあっては、自らの形式そのものが自らの実現と成就とを阻んでいるのだ。それは、信仰する観念が自らの実体性をまず賢気懐迷水の彼方へと投擲してしまっているからだ。信仰は、自らの妄想に媒介されてのみ自らを規定することができるにすぎず、自らによって表現された自らの本来性に自らが耽溺している形式である。このように宗教体系において、観念は、個体の死とともに自らがただ単に消滅してしまうものであること、を否定した。ために、観念は、個体の死とともにしか消滅しはしない実在的な規定性すなわち観念自らの具体的な内容一切、を観念自らの永遠性とそっくり引き換えにするほかはない。それ故、宗教体系の許で、世界の時間は一回帰的に定向し途絶する有限の時間でなければならない、その世界の時間の涯れも極めて近い将来において帝国は絶対に解体し終焉するのでなければならない。宗教体系は神あるいは観念のものでない永遠を妬む。このことは逆に言えば、宗教体系からは政治、国家、社会と云う虚構が既にその外に出てしまっている、と云うことに他ならぬ。宗教体系と云う客観的精神はいまや社会組織と一つのことではなくなっているのであるから、宗教の内容を伝える言語はもはや部族の伝承であるわけにはいかず、それは当然書き言葉あるいは死の言語による教典でなければならない。はじめの文字は帝王の墓石を飾る墓碑銘として刻まれたのだ。教典は信仰の内容を規定することから、教典の内容は信仰を規定するように移行し、教典の内容即ち教義を規定するものとしての教義学が成立しはじめる。これが、神学だ。神学は、信仰という現場での観念の自然性から呪的心性を剝奪せんとする観念の要請である。

宗教体系においては、観念は結局世界の自然過程の内に自らを客観化することから全く挫折し、自らを超越的なものとしてのみ示した。つまり、観念はここでも、どのように規定されてもその規定性に馴化せず自らを規定性の外に復活させつづけるようなもの、として自らを示したのである。宗教体系の観念にとっての外的規定性をなす客観性は俗社会としての世界であり、観念は、こうした世界の自然過程ないし自然的社会過程を自らの他者としての無とみなしたのだが、このことは、自然過程において人間が意志性を実現する技術が進展したこととむしろ対応している。というのは、技術の進展は、社会において人間の意志性を実現しゆく技術すなわち政治あるいは王権あるいは歴史時代を喚びおこし、支配権力及至国家の生成と一つことだからである。宗教体系の許で、個体の観念は、個体の死を尖鋭に自らの課題とすればする程、宗教そのものの内容を自らにとって外的な客観的なものとして見ることを離れ、むしろ自らの観念そのものとして、見はじめる。可視的な俗社会がその輪郭を整えるにつれ、彼岸と内面とは目にみえぬことによって内通し乍ら同定される。神と云う一つの実在性が、個体の観念の内面性へと転換していく。俗社会において自らの姿を示さないようなものとしての神は、俗社会にとっての単なる内面性であるにすぎない。このように宗教の内容が個体の観念の内容と同致していく過程が、宗教から神学、形而上学への過程である。

（神学体系）

宗教体系において、個体の観念が自らの不可視の他者である神を直観することが可能であったのは、神が観念に先行しており神が観念をも創造し神が観念を配慮しているからであると言われる。しかし、宗教の創世譚は創世神話の時間逆行と云う詐術の延長上にある。観念の自己展開の帰結が宗教の前提へとすり替えるこの事実を反省するとき、観念は宗教体系そのものの可能根拠すなわち信仰の根拠を自らの対象とする。このとき、宗教体系は神学体系或はスコラ学に移行している。

神学は、神が唯一の真理であり唯一の絶対者である、と云うことを自明の前提として出発する。神学は何よりも宗教体系であるからだ。しかし、この無限判断を前提として出発した神学体系は、その帰結において、その前提であった無限判断に今や論理（アリストテレス）を媒介として具体的に

証示されたものとして立ち戻ると云う矛盾した円環をなす。この無限判断の主語である神は、宗教体系の許では、観念の具体的な個々の規定性に対する否定及び対立における無規定な純粋な絶対の普遍性として規定されていた。神は無規定をその規定とする。もし神があくまでも無規定であり宇宙のままで神であるとすれば、それは神の不可知論であって、宗教の再結合或は愛の主題に背き、もはや宗教の圏内から形而上学の圏内へ這入ってしまっていることになるだろう。神は、このような抽象的な普遍性へと呪術体系及び神話体系から超出していくに従って、世界の唯一の実体であるとされながら全く無内容な実体性へと移行していくことになる。だからして神学の主題は、人は如何にしてこの無内容な無限者を唯一の絶対者として認めるに至るのか、と云う論証にある。神学においては、観念が自らの規定性から分離し無規定な無限者へと志向しつづける動態であること、の根拠そのものが観念によって問われているのだ。信仰が無内容な志向性であることにすぎぬことに拠り、信仰の対象は今や無内容な絶対的他者としてあらわれた。信仰は無規定なまま自ら信仰であることは出来ず、故、信仰は自らが真であるかを気遣い、自らを規定せんとする。そのようにして、信仰が自らの証しを、自らの対象性つまり神においてでなく、自らの対象性つまり神の規定性において見出すようになったとき、神学体系は宗教体系から全く区別されている。そも神学においては、存在論（信仰）と認識論（知）とが既にして背違している。神の本体論的証明といった神学の企図は、神を神以外のものから例えば矛盾律から根拠づけんとするような異端である。神学がその全ゆる努力を通じて表明していることは、汎そ了解され経験され説明されるものだけが存在し、了解されず経験されず説明されないものは存在しない、と云う判断、すなわち不信仰である。神学はその本来の対象であった神＝真理を、存在論としての神と、認識論としての真理と、の両極に分解した。神学は真理を認識論へと自立させることにおいて、創世にはじまる逆倒した時間流を再逆倒することになる。神学は、ここで、神から区別された真理をそのものとして扱うとき、もはや既に宗教体系から完全に外へ出てしまっており、かくして形而上学である。

（形而上学）

客観性へと指定された観念であれば、すべからずそれは形而上学である。というのは、観念はどの時点においても基本複合として統体をなしていなければならないから。従って、呪術体系、神話体系、宗教体系、神学体系を含める観念体系は、すべて、目にみえぬものを見る、と云う自体的な形而上学体系に他ならなかった。しかし、本来の意味での形而上学だけが、真に個体によるところの学生産物である。形而上学は、従って、固有名詞を冠せられ、責任の在処が周知のものとなる手仕事である。

この本来の形而上学にあっては、個体の観念だけが、自らを特異点として、存在と非在とを融即させ、目に見えぬものを実在性とし、このようにして体系を構成していく。このようなこの個体の作業、ことばで綴られた目に見えぬもの、は抒情詩ないしロマン派である。形而上の真正の意味は、あくまでも感覚、意識に媒介されてい乍らしかもそれらから全く区別されるこの個体の観念、この観念に宿っている。しかしながら、形而上学を構成する個体の観念は、自らの観念を客観性としてたてることを通じてのみ自らを普遍性として明示することができるのであり、そのようにして発狂を逃れようとする。というのは、死において共同体から切断され、生において宗教から切断された上は、個体は、自らそのものを観念の一切とし、観念そのものを個体の一切としなければならなかったからである。個体が、自らは内容豊かである、とただ単に内面的に確信しているだけでは、個体の観念は無内容であり、個体の観念がそのようなものであるにとどまって何もかも客観性として外へ産み出さない限り、世界は一切無内容へと転落するだろうから、である。したがって、類の過

程と云う個体の自然過程、あるいは呪術体系、更には宗教体系、を潜り抜けて浮上した個体は、それが退行せず自らにおいて踏みとどまる限りで、形而上学者である。個体性と普遍性とは形而上学では一つのこととして起っている。それ故、これは学であり、就中、体系的学あるいは学体系である。客観性としてこのように完成された学は、叙事詩である。形而上学が客観性として一つの普遍性であるためには、形而上学が論理をあらわすものでなければならない。この形而上学の論理は、個体と云う観念がその出自を宇宙とする他ないと云う事実が弱す。学は体系でなければならぬ、しかも形而上学は、個体によって体系として構成されなければならぬ。体系は完結する統体、死の代替物であり、体系において部分は全体を、全体は部分をかたどって造られ、そのことに拠って体系は円環する。体系は、主観性偶然性を排除する。論理と体系と、この両者が、もはや神学における神あるいは絶対者といったものをもたなくなった形而上学における客観性としての普遍性の形式であり、形而上学の学としての根拠だ。形而上学においては、宇宙をたどることと、己れという観念を開示し展開しきることと、が運動の方向としては逆方向であり乍らも一致する。これがいわゆる、体系の至福だ。形而上学は、個体が個体のままであり乍ら、個体自らの死を自らの存在或は宇宙と同じ大きさの事件にまで広げよう、としたとき採る方法である。それ故に、形而上学は、部分ではあるがそのまま全体であろうとする頭脳、多くは挫折する、野望である。それは、観念が宇宙に対処することが、人類が自然と対処することを通じてのみ可能であり、ために一見科学の機械仕事と競合し科学に気圧されるせいである。そこでは、形而上学は範疇論に拠ってだけ記号論的科学の非論理を突破できる。学体系は、経験の全領域所与の全ゆる諸観念を併呑しなければならぬと云う学者の自責に導かれて展開する。形而上学の許での個体にとって、世界が真に完成するのは、客観性としての普遍性あるいは作品として学体系がたてられたときであるからだ。形而上学は、宇宙の秩序 Kosmos をその対象ないし内容としそのことに拠って体系についての学である形而上学、即ち神学から出発している。しかし実在する体系、についての学は実は、学の体系、としてしか実在しはしないのだ。このことから、体系的学は、諸学の学である学体系として自らを構成しゆく。形而上学の方法とは、学体系のこの構想そのもの、体系の円環の設定そのものである。この体系の構想そのものが学体系の内容となる。他の学ではその内容と学の対象とが一致する他者志向なのだが、体系構想とは人智の証しであるのだから、学体系においてはその方法とその内容とが一つのこととして合致する。学体系は、諸学をその有用性あるいは自然性から拘い上げ、統体として、至高の人間の世界として布置措置し直す行為である。形而上学の展開過程は、従って、学体系が不断に自らを拡大し自らを更新する一つの過程であり、二元論（他志向）から一元論（体系）へ、そして一元論（独断）から再び二元論（宇宙との出会い）への、生成と死滅の永い円環する道程である。この円環が釘付けされた一瞬に学は凝固し、学者の往生によって学は墓碑銘となる。形而上学は、類の過程有用性等々に決して解消されない、観念の手になる作品である。形而上学は、それら向他性の諸形式を徹底して虚け侵略し換骨奪胎する、そのことによって科学とは真の仇敵同志である。即ち、形而上学は向他性或はエロスをしりぞける向自性であり、非性的な、単性的な、両性的な、同性的な、もしくは超性的な観念の産物である。すべての組織された観念は形而上学なのである。ただし、形而上学は自覚して自らを形而上学として構成しない限り、体系を構成しゆくことができず、そのため向他性へ、部分学へ、モノマニアへ、あるいは百科全書博物学へと転落する。例えば、社会科学の多くは、「人は物だ」あるいは「物は人だ」と対象性の形式で断言するにすぎないような、昔乍らの先入見であって、科学を自称しながら科学のたしかさすら持ち合せていない。これに対して、体系一般は、説得だの啓蒙だのと、外的にこれを覆すことはできない。体系はそれ自

体の含む内的契機によってのみ変態を遂げる。形而上学という学体系は、その端初あるいは前提としての個性性、つまり世界を構成する個体の同一性及至独自の個性性、一者が脅かされ解体され氷解するときにその根拠を失い、もっとも頑固な父まぐれによる以外もはや体系への企図は産れえない。そのような時に自然群生するものはいずれ分科学あるいは科学のみである。

妄想とは、自身の規定性を否定し或は逃れるために別の規定性を自身心的に作為することに他ならぬ。かくして妄想は錯誤であり思い込みなのだが、この自然性と云う人間の規定性とは別の外的な規定性が人間相関としてやってくるならば、それは人類にとっては、文明と云う名の虚構である。この虚構は、また別の自然性としての規定として人間にやってくるならば、記憶と習慣のメカニズムであり、刷りこまれた規定性だ。文明、非宇宙、不自然と云う名の自然。エロス、自然の欠乏と言う自然の心性。

(科学)

近代の方針は、科学だ。科学は、機能としての呪術、属性としての宗教、方法としての神学であり、それらのいずれをも深く近親憎悪しながらも自身はその出生の経緯に気付かない、と云う自体的な形而上学である。宗教が自らの誕生を信じようとしないうる退行的分裂症であるのに対し、科学は自らの死を信じない呪術的パラノイアだ。

科学は存在論を欠く。というのは、経験的な因果性という形式だけを必然性として理解したために、膨大な偶然の宇宙を法則と法則との間に湧き出させた。科学は一つの必然を言うために万余の偶然を視界から抹消せねばならぬ。科学が積み残したこの偶然は存在へと収録する。存在は、科学においては、他の存在の結果であるか他の存在の前提ないし成分をなすしかないのであり、従って、存在を説明するものとして科学は存在しか知らぬのであるから、はじめの存在そのものが科学にとっては偶然でなければならない。科学はこのようにして、物質の質料認識に失敗する。科学と云う向き合い覗き込みの形式は、対象に拘束され対象に与えられた人間的範疇に拘束されている。即ち、科学自体が、仮象である。科学は、自らの対象が人間的範疇と云う観念に他ならず自らのたてる法則が人間的範疇の生理に他ならぬと云うこと、を自覚していない。科学は自然の中の自然性を範疇に抱って裁断し培養する。範疇は、有用性と云う仮象に依っているから、科学は自らの動機について無頓着な情報収集狂だ。科学は実物を移動させる。科学が、目に見えぬものには頼らぬ、と自負する故だ。しかし、実物は科学に凝視られたまま勝手に運動するにすぎない。科学は実物を動かして予測と台致させるという仕方でも自らを客観性として保証し、このようにして円環を遂げる。科学は法則として以外に自然を知ろうとは思わない。科学は、自然の解体であり自然の絶対的な否定である、と同時に自然の絶対的な実現であり再現でありコピーである。科学は自然を飼育し、自然は科学を飼育する。形而上学が天皇と同じく無限責任であったのに対し、科学は、企業と同じく、無記名で有限責任である。現在、科学の民間伝承はない。人類に普遍的な叙事詩だ。ただしこの結末を今もって誰一人知らぬ。科学は自らの整合性を自らの未知と偶然においてのみ支えている。科学において、観念は、自らの見出すものが体系的でありさえすればよいと云う心性である。科学においてはこのように、観念は、体系を外部に望見するにすぎない。しかし、認識の不幸というか、見ることに於いて体系と観念は全く分離しており、科学はいかようにしても部分学であろう。科学は、絶対的存在を自らの内容とすることを断念しており、むしろ存在の形式ないし法則を絶対の内容とするが、このことに拠っても科学は自らを部分学として証している。即ち、絶対者を追放した自然界の学は、範疇あるいは抽象の種別に従ったさまざまな特殊の諸学へと容易に分

裂し、科学と云うジャンル全体に環節的部分として対立する部分学となるからだ。科学は、それ故、宇宙の表面である自然の過程をなぞり、過程へと自らも解消してしまう運命にある。

(企業)

このようにして科学が発見したものは、物質ファシズムである。このことに依って直ちに科学自身も自ら物質ファシズムとして立ち現われる。これが、企業だ。

企業は工場と云う容器で事物を培養する。企業あるいは科学の原理は、自然からますます集約的にその過程を収奪することである。現在この最新機軸は原爆である。しかし逆に原爆と云うネズミ講は科学と云う利子の元本である人類に抵当権を設定した。これはあくまで宇宙と云う国家の監督下でおこったことである。企業は断じて採算をとる実験室だ。科学の機能論理は、存在一切を過程へとおとしこめ実体性を蒸発させた上に、過程あるいは質料の大集会を唯一の形態と言ひ含め実体化するファシズムの手口である。企業は科学をその形式とする自然の頭脳、動起した自然、あるいは没落した人類。企業は資本主義と云う部落を形成する、企業は人間関係にすぎず、社会と言える程の代物ではない。企業は向他目的をもたず、自己目的あるいは目的喪失である。自然と同じく単に過程であるにすぎないような自然態であるからだ。恐慌不況も自然の嵐で科学と云う叙事詩の舞台にすぎぬ。プロセスに還元されてしまえば、何事も宇宙の安息に等しい。企業の中では、人は最早血を流して死ぬことのない農民となってしまった。しかし、科学が今や合理主義遍執病を意味しているとしても、反科学は単に非合理怨念分裂症にすぎぬ、分科学の垣根の裏店で生い育った無知は今やそのまま宗教性の裡へ叩き込まれることを意味する。保健薬の効能書も経文呪文も区別がつかぬのだ。企業は自然を代行する技術だ、技術は物に対する政治だ。企業は政治であり、従って、事物と人間を自然性のうちで放任することを媒介として自らを実現する作為だ。企業の作為は自然の無作為と同一の結果をうむことを目指す。それ故、企業があれ程の作為を勞して保持するものは、実は、自らが自然を作為するようなものとしてあること、即ち、企業の観念性、に他ならない。蓋し企業は近代の文明であり人類の栄光の一翼を担うべきものだ。事物を演出するものは企業だが、企業はまだしかし宇宙に演出されている。企業は、自然（無作為）を作為することにおいて、演劇の今日の形態を創出している。

(貨幣)

かつて死者の財物はことごとく副葬されるか焼却されるかした。家屋は焼き捨てられ、その内の家財日用品も一切合財焼かれた。食器はうち欠かれた。個性性と財物とは固く融即していた。死んだ個体の身体が葬送に付されねばならないように、個体の所持品も世界からその形態を抹消される。このような、個体と所持品との相関が、所有である。しかし、帝国が齎した商品と貨幣とは、事物としての個物でなく抽象物であり、循環し、ためにどの個体とも融即しない抽象性だ。貨幣は本来死の浄化力を備えており、従って、死者の手からも譲渡される、即ち、相続される。貨幣は、肉体の一部あるいは財物とは異り、屍あるいは媒話だ。この貨幣の呪物性と循環する無限の永続性とは貨幣の物神性の起源だ。

プロセスとしての企業の自己目的が外部に客観化されると、貨幣あるいは利潤である。貨幣は死の手形であるから、生命あるものを糧とし単為生殖する。貨幣あるいは死の呪物性と云う逆倒は、死が死であり乍ら死として再生すると云う逆説つまり利息において完全なものとなる。貨幣は、プロセスの中で死として生き延びようというエロスの対象だ。企業は、貨幣にとっては、事物の塊りすなわち資本である。貨幣と云う死あるいは虚構の主語が人の肉を買うとき、賃労働者の肉体から人は内面性としてだけ区別されて詩人となる。企業は日々散文的平均律暦法時間の中で死と再生の物

語を演ずる。貨幣という虚構を仮りの主人公とする作者不詳の筋書きは経済学がその結末を探す結局うやむやの裡に迷宮プロセスへ解消する。貨幣を虚構として扱わないために経済学は現場の実測が効かない。

(芸術)

全く一方的に規定されたまま過程におしこめられた単位としての個体は、無記名の個人として内面性であるから、表現或は抒情詩を採る。叙事詩は実現すれば革命であるが、抒情詩は内部事情であり人間的時間を一步も出ない陰語だ。言語と云う置石にたぶらかされた言語工学造園術。労働者ロック、管理者無調律。抒情詩人は家庭において生命(プロセス)を保障されている、ソガイ回復の家庭サイ園、維持費は企業が自然保護の名目で負担して、しかも穫れるものはいずれもとんだ珍奇作物ばかりときている。生命を保証されれば抒情詩人は移動しても旅にもならない、梱包される頭脳。無数の個人はもはや互いに区別の仕様もなく、その中でやはり類の過程文が舞台をめぐらしている。

(国法)

法は伝承ではあるものの創世譚ではない。従って法は常に自らを証しつづける必要がある。非合法なものに対する裁判がこれだ。法が法としてありつづけるためにはだからどうしても非合法を喰わなくてはならぬ。裁判において法は自らを産みだしつづける。これが法現象でありあくまでもプロセスだ。法は権力と分家した禁止であり、人間で書かれた掟であって、共同観念の一形態であるが、法は自らの正当性あるいは法源について何一つ知るところがない。このように法は部分体系であり法学は部分学だ。法は群の領域の内部の形式規定だ、したがって人は合法的である限りで生命(プロセス)を保証される。しかし、群を演出するかに見えるこの法も、その理念である正義は実体なく何の役に立つでもなく、類の過程の一つの媒語であったにすぎない。社会という規範ルールは法と云う虚構内部でしか通用しない。

(政治)

一神教の記憶が民主主義ヒューマニズムを産み、共同体の記憶が共産主義ナショナリズムを産んだ。汎そ全ての範疇の統御が政治である以上、政治とは革命の意志を否定する。革命は類の意志を否定する摂理の人間化であり、政治がそれを権力するテクニックであるとき、ホモサピエンスとは言い逃れする革命の群れである。そのとき武力=人間は政治自由のテクニックとして在る。テクニック=事物の人間性は革命の方法でなく政治の方法である。

(権力)

群れから自然性の海が徐々に退潮していった後に自然から出張った別の均衡あるいは第二の自然あるいは習慣すなわち文化が姿をあらわした。文化はまず群に訪れ内面も外見もない共同観念としてあった。この主体のない共同観念の中で最も早く最も能く励起した個体は、呪術者或は呪巫であった。この呪巫は、体系の最初の体現者であり、個体であり乍ら社会であり、宇宙であり、神であった。呪巫が、群れの客観性あるいは無名性によって単に規定された個体であることを辞め、自らその無名性として群の掟を告げることで、群の中の他の諸個体は覚醒せぬ安逸を食うことができた。かくして、呪巫は群れに平和をもたらす。権力は何時も群れに平和を齎らすものだ。部落では、呪巫だけが宇宙と熾烈な争いを繰返す。その一方で、部落民はいつのまにか、人類の社会と云う事柄を、部落の諸個体と呪巫との人間関係ととり違えた、感情の行き違いであるとか、嫉妬とか、憧憬とか、憎悪とか。呪巫にあっては文明が一身に結節している。呪巫は動物的一元論から最も早く自由となり自ら技術を手中とした。呪巫は、規定されないと云う仕方、群れの中では他の部落民から区別され、そのことで部落民から規定されてしまう。これが、役割としての呪巫である。ここから初めて公私、聖俗が分

溜してくる。呪巫が呪巫のままで覚醒したときに呪巫は自らを権力として自覚するようになる。権力は人に対する政治力として現象するのだ。この覚醒した呪巫は、部落の権力者となり、社会体系の演出者となった。このように、一旦喪失した個体あるいは人稱を取戻して群の中に居ることをする呪巫、これが首長である。首長が出現することに拠って、政治と祭祀とが解離しはじめる。首長が司るものは、社会の類の過程である。首長がそれを司る限りで首長は類の過程からへだたり、自由となる。自由であるからこそ首長は類の過程に対して責任を負う。首長は最初の教養人となる。首長が司祭として祭祀の進行を司る場合には、首長は部落民の観念及至は時空を左右している、というのは、祭祀は宇宙の仮象としてあり時間の根源であるからだ。首長は無限責任者であり、首長は、この責任を全うするためとならば、自ら個体プロセスであることに何の未練も示すことはない。首長が宇宙の秩序ある運行の操作に失敗した場合には、首長はしばしばその生命を絶たねばならない。これは首長にとっての革命だ。首長は、最初の非人稱であり(どの人稱でもない余)しかもそれを一人稱と融即させること、すなわち語る=張ることである。非人稱である呪巫の部落民に対する権力は決して武力によって生ずるものではない。むしろ、呪巫は個体の観念の独自性を取りこみ溶解してしまうのだ。あるいは個体を当人よりもよく知ると云う易者の造口だ。呪巫と云う観念は無規定で実体がなく外見と内面とが一致する必然性がない。群れの相関において規定された部落民個体の観念の時空性の必ず外側に呪巫はおり、そのことに拠って個体にとっては呪巫が宇宙であるのだ。群れの相関において規定された個体の観念は、この無規定の呪巫において自らの観念の志向性の一切を発見する。部落民個体は呪巫に見透かされてしまうのだ、個体の全くの覚醒がない限りは部落民個体の個別性は自らを個別あるいは真性一人稱として主張することもできはしない。そのための言語は呪巫が手にしている。呪巫においては、ことばを聴くこととことばを告げることとことばを創ることが一つのことであり、呪巫ではなくロゴスが語るのだ。呪巫の語りの主体は、もの(精霊)であった。つまり、もの一がたり、だ。monoは威力manaと符合する。威力とは、ものをいう、こと。権力は、ものをいわせる、こと。規範ないし制裁は、めにものみせる、こと。恥辱は、ものわらい、だ。個体は呪巫に抗おうにもその論理もその威力もその言語もない。呪巫はawだ。個体は呪巫を畏怖する。例えば、敬語を用いるとは相手の世界了解に馴化してみせることに他ならない。故、呪巫の権力の証しだ。呪巫にことばを奪われた群れは宗教性の内へと叩きこまれる。言葉を奪われたものは、モルヒネ注射の如く言葉を供給されなければ心的に生きおおせることはできないのだ。(文明史において見られる演劇的人類)戦争の危険を放棄した結果、文化は目下唯一の刺戟の源泉を失って停滞している。アメリカ帝国内期の辺境大倭州での大衆の解離は一人の純な浪漫者の内に鉄の棘を突立てる程若傍若無人振りであった。そもそも生命の維持に観念が役に立つわけがないのだ。適応するだけなら動物はみな充分生命をつないでいる。二本肢で立ったのは生命の維持のためではない。どのような生命も観念に安堵を与え、観念の安堵を保障することなど出来るものではない。宗教的心性が他者志向に釘付けられると云う自然現象の圏外で、光輝ある個体たらしとする現場への意志が、いさぎよさだ。学体系も、現場への意志がある限りはすぐわれよう。近代と云う時代では、直接モナドと宇宙とがせめぎ合う。国家、科学の宗教性、論理の借称、産業科学に組織科学。科学が全く徹底して叙事詩であるお蔭で、最近では詩と云えば抒情詩のことになってしまった。呪術性として過去のものどころではない。人類は蒸し返しが得意だ。その性的索引反撥と云う範疇が形而上学体系に隔世間歇噴出すればフリー=情念、力とはなる。原始人に演劇がないように見えてもしたら、それは原始人が恒に劇を演じているからだ。内面性がないとしたらどうして演じないでいることができようか。呪巫の作為が演劇の骨頂だ。観念が個体から個体へと移り住む。部落民個体は、呪巫が演ずる通りに類の過程を演ずれば、生命は

保証されると云うことだ。これが、農耕祭儀だ。部落民個体には、もはや、呪巫の与えた規定すなわち個体の与えられた役割以外何もない。組織が形成された部落では個体は役割以外のものでない。以後、キリストを採る登場人物という役割が役どころの役者がこの地上に何百億人いたことか。演劇がはじめて他と区別されるのは、まつり(祭儀)においてであった。ここで、作為が無作為に行なわれていたことから、無作為が作為的に行なわれることへと転換する。これが、装うこと或は振る。虚構は、諸個体の相関の裡に客観化されたる妄想、即ち、永続するデマだ。狂気は妄想感覚である。国家は全ゆる虚構の集積回路だ。従って詩人がその生命を返却する場所は国家である。人類は、社会の演出によっては国家を演じ、自然の演出によっては類の過程を演じ、詩人は宇宙の演出によっては文明を演ずる。だが、今やかような一切の詩人及び人類の変身を規定する技術が演劇である。無規定をそのままひきうける励起した覚醒が出現し宇宙を対象する人類を文明の資格で演じはじめなのだ。人類は内部にされる。宇宙との出会いに一元論も二元論もない。ここで人の光輝をかかげるものは何か。呪術は死を区別しなかった。宗教は死を否定した。科学は死を切り刻んだ。国家は死を管理した。いずれも幻想だ。いかな文明も死のタブーを解いてはいない。即物死と云う仮象が何の怖れでもなくなれば国家も崩壊しよう。右翼と左翼とは時間を運滅させるか昂揚させるかだけの違いだ。これらファナティックな心性、かつての形而上学、ロマンティズムの栄光を目上の舞台より追落して仕舞ったものは実証主義であった。資本制生産様式の大工場が生命の維持を手仕事に抛らずに可能としている。科学は、自然性における自然の自然性＝法則をそのままとりだそう、とする意志である、従って、自然性が眠り＝死の形式だとすれば、科学する人類が自然＝眠りを摘出するこの行為が、人類と云う事実の証しであり、人類のまず第一の栄光である。ところが、科学がこうした死＝眠りを摘出する覚醒した頭脳の行為であることに拘って、この科学自体、科学する人類そのものが既に必ず科学の圏内を脱してしまっているのだ。

(人類学基本資料)

E. デュルケム	『分類の原初的諸形態』		
M. モース			
J. ルソー	『言語起源論』		
S. フロイト	『幻想の未来』		
M. ハイデガー	『有と時』		
C. フーリエ	『四運動の理論』		
K. マルクス	『学位論文』	CN 1	HASHIZUME, D.
J. フレイザー	『金枝篇』		
G. ヘーゲル	『神学論集』	completed	1971-6
G. ヘーゲル	『哲学体系』	copied	1979-5
A. アウグスティヌス	『告白録』		
I. カント	『純粹理性批判』		
C. レヴィ・ストロース	『構造人類学』	¥100.-	
L. レヴィ・ブリュル	『未開社会の思惟』		

以上諸君のよりよき理解のために掲げてみた。